

令和4年10月号

春日部セントノア病院

〒344-0001
 埼玉県春日部市不動院野1112-1
 TEL048-760-1200
 FAX048-760-1201
<https://www.saintnoah-kasukabe.jp>



縁日風 敬老の日 カラオケ大会



～目次～

- 病院短信
 - 日常の一コマ
 - いきいき看護・介護
 - 相談室だより
 - 敬老の日カラオケ大会
 - スタッフ紹介
- 渡辺 弘子
 千葉 理絵
 勝田 梨恵
 広瀬 君子
 デイルームにて
 熊谷 広美

10月の予定

◇秋祭り 10月22日(土)
 ◇誕生日会
 1病棟 10月 3日(月)
 2病棟 10月 4日(火)
 3病棟 10月 3日(月)
 各病棟デイルーム 14:00~



スタッフ紹介

医事課
 くまがい ひろみ
 熊谷 広美

星座: やぎ座
 血液型: B型
 好きな食べ物: お寿司



入社して3カ月ほど経ちました。医事課の先輩方や優しい皆さんに支えてもらいながら、毎日頑張っています。コロナ前は友人とドライブがてら、地方に美味しいものを食べに行ったり、綺麗な景色を見に行ったりなどしていたのですが、最近はなかなか行けないのが残念です。患者さんのご面会もいろいろと制限付きだったり、好きな時に会いに来たりすることが難しい現状です。早くいろいろな規制がなくなることを祈っています。

『ユマニチュード』

渡辺 弘子

先月「ユマニチュード」についての職員研修がありました。ユマニチュードとはフランス語で「人間らしさ」の意味を持ち、認知症ケアにおけるコミュニケーション技法の一つです。同じテーマでは今回で3回目となりましたが、とても心に響きましたので、改めて紹介したいと思います。

ユマニチュードの4つの柱

- 【見つめること】笑顔で視線を合わせる。患者さんの正面から。長い時間をかけて。
 - 【話しかけること】声のトーンは優しく穏やかに、愛情深く、優しさを込めて。
 - 【触れること】広く柔らかく、ゆっくりなでるように、包み込むように触れる。
 - 【立つこと】立つことにより、血液の循環状態を改善し、筋力の低下を防ぐ。
- 肺の容量を増やすことが出来る。骨に負荷をかけることで骨粗鬆症も防ぐ。

認知症の症状というと、記憶の障害や認知力の低下などが一般的ですが、視野がとても狭くなってしまうことも症状の一つに挙げられます。視野の狭くなった患者さんは真正面からしか物事を判断できないため、横から急に人が現れたりすると驚いてしまい、それが原因で介護拒否や抵抗に繋がってしまいます。そこで、患者さんの正面からゆっくり近づき、目の高さを合わせながら、笑顔でアイコンタクトをしつかりと交わすことで、意思の疎通が取れるようになります。また、患者さんの態度が柔らかくなったり、攻撃的な言動や行動が減ったりするという効果もあります。これは患者さんが私たちを味方だと感じてくれて、素直な気持ちで接するようになったからなのです。

ふと、ノア Smile の「日常の一コマ」で紹介された患者さんのご家族の言葉を思い出しました。「家でみることは限界だったけど、父が大切にされていることが伝わりました。セントノア病院に父を入院させていることは私の自慢です」この言葉がまさにユマニチュードを実践した形なのではないでしょうか。また、事務局長が病院理念についての講演会の中で話されている言葉も思い出されます。「認知症患者にとって、スタッフの笑顔・優しい言葉・思いやりは全ての医療、全ての薬に勝る」これもユマニチュードと重なるように思えました。日々4つの柱を意識しながら、一人でも多くの患者さんにユマニチュードを実践していきたいと思えます。

日常の一コマ

今月は1病棟のカヤ子さんの一コマです。カヤ子さんは昭和6年、和歌山県に4人姉妹の長女として生まれました。尋常高等小学校を卒業後は裁判所の事務職に就き、23歳で結婚をされました。その後はご主人の都合で上京し、司法書士事務所で60歳くらいまで働いていたそうです。そして仕事を辞めてからはご主人と共に埼玉県の草加市に移住し、老人会に参加したり、友人とお茶をしたりと楽しく暮らしていた（長女さん）ようです。



平成17年にご主人に先立たれてからは一人暮らしとなり、徐々に年相応の（と思われる）物忘れが出始め、4年ほど前からは「胸が苦しい」「眠れない」などの訴えをするようになり、近くのクリニックを受診したのですが、診断では特に異常は見られなかったそうです。その後も不安感や焦燥感が段々と強くなり、「不安で仕方ない」とか「寂しくてしょうがない」「薬、飲んだっけ？」など長女さんへの電話が増えてきたため精神科病院を受診、「認知症」と「うつ病？」との診断を受け、このまま一人暮らしを続けさせるのは難しいと判断した長女さんは知人の紹介で当院を知り、すぐに入院を希望されました。

入院当初のカヤ子さんは歩行がおぼつかなく、ふらつきも見られたため、移動には主に車椅子を利用していました。夜間になると一人で歩き回ることが多かったため、スタッフはカヤ子さんの『見守り』を重点的に行っていました。ところがある時、カヤ子さんは自室（病室）で転倒し、大腿骨の転子部を骨折してしまいました。すぐに当院と連携している病院に連絡、手術を行いました。入院直後の転倒骨折は、私たちスタッフにとって、とてもショックな出来事でした。手術後すぐに当院に戻ったカヤ子さんは、骨折部位の痛みも軽減し、今ではトイレにも自力で行けるようになりました。

現在のカヤ子さんは日中穏やかですが、たまに夕方になると落ち着きがなくなり、時には大声を上げることがあります。そんな時はスタッフが一緒に歌を歌ったり、手紙や塗り絵をしたり、1階の談話室でアイスクリームを食べに行ったりするようにしています。その談話室で、カヤ子さんとお話していた時のことです。「お住まいはどこでしたっけ？」と聞いたところ「〇〇団地ですよ」との返事に私はびっくりしました。そこは何と私が小学生の頃に住んでいた団地だったのです。それからは「私も〇〇クリニックに通っていましたよ」とか「あそこのお蕎麦屋さん美味しいですよ」とか、カヤ子さんとの共通の話題が出来るととても嬉しくなりました。これからも共通の話題や地元の話に花を咲かせながら、カヤ子さんの笑顔を沢山見られるよう援助していきたいと思っています。



1病棟 看護師 千葉 理絵

相談室 だより

医療相談員 広瀬 君子

10月に入り、今年も残すところあと3カ月となりました。感じ方は人それぞれだと思いますが、年々、月日の経つスピードが早く感じるようになり、今年は特に早い気がしています。

コロナ禍になって3回目の秋を迎えました。当初は、地域のイベントや学校行事などが次々に中止となってしまいました。なるべく外出を控え、出勤や登校もせずにリモートでの会議・授業が始まり、人と接する機会は激減しました。当たり前のように行っていたことが突然できなくなって、この先どうなるのだろうか、と不安でいっぱいだったことを今でも覚えています。当院でも緊急事態宣言の発令とともに面会中止を余儀なくされる時期もありました。ご家族の皆様のご理解ご協力には改めて感謝申し上げます。

コロナ発生から間もなく3年が経過しようとしています。世間一般でもウィズコロナと言われているように、今のところは各自が感染予防対策を続けながら日々生活していくしかない状況なのかなと感じています。

患者さん達への感染の心配が少しでも減り、笑顔で過ごせることに繋がるように、微力ではありますが、これからも感染予防に努めていきたいと思っています。



いきいき看護・介護

2病棟 看護師

勝田 梨恵

私の父は73歳、持病もあるため定期的に通院をしています。そんな父から「通っている病院を変えたい」と相談がありました。理由を聞くと、「今通っている病院の先生は話を聞いてくれない。電子カルテばかり見て、顔を見て診察してくれない。そして、何も言わずに薬を増やすんだよ」ということでした。

結果としては通院する病院を変えることになりました。すると、あれほど不満を漏らしていたのが嘘のように「今の病院では話を聞いてくれる。苦痛を分かってくれる」と喜んでいきます。高齢の父にとっては、話を聞いてもらえることが一番の薬のようです。

父の体験を通して、当院の患者さんの思いを改めて考えるようになりました。患者さんの喜怒哀楽に寄り添うこと、簡単なようでとても難しい課題だと思えますが、共感することを一番に考え、これからも患者さんに寄り添っていきたくと思っています。

